

浄土

monthly
JŌDO

January 2005

1



鎌倉 若宮大路

法然上人鑽仰会



昭和63年5月号



昭和63年6月号



昭和63年7月号



昭和63年8月号



昭和63年9月号



昭和63年10月号



昭和63年11月号



昭和63年12月号



昭和64年1月号



平成元年2月号



平成元年3月号



平成元年4月号



平成元年5月号



平成元年6月号



平成元年7月号



平成元年8月号

寺院紀行

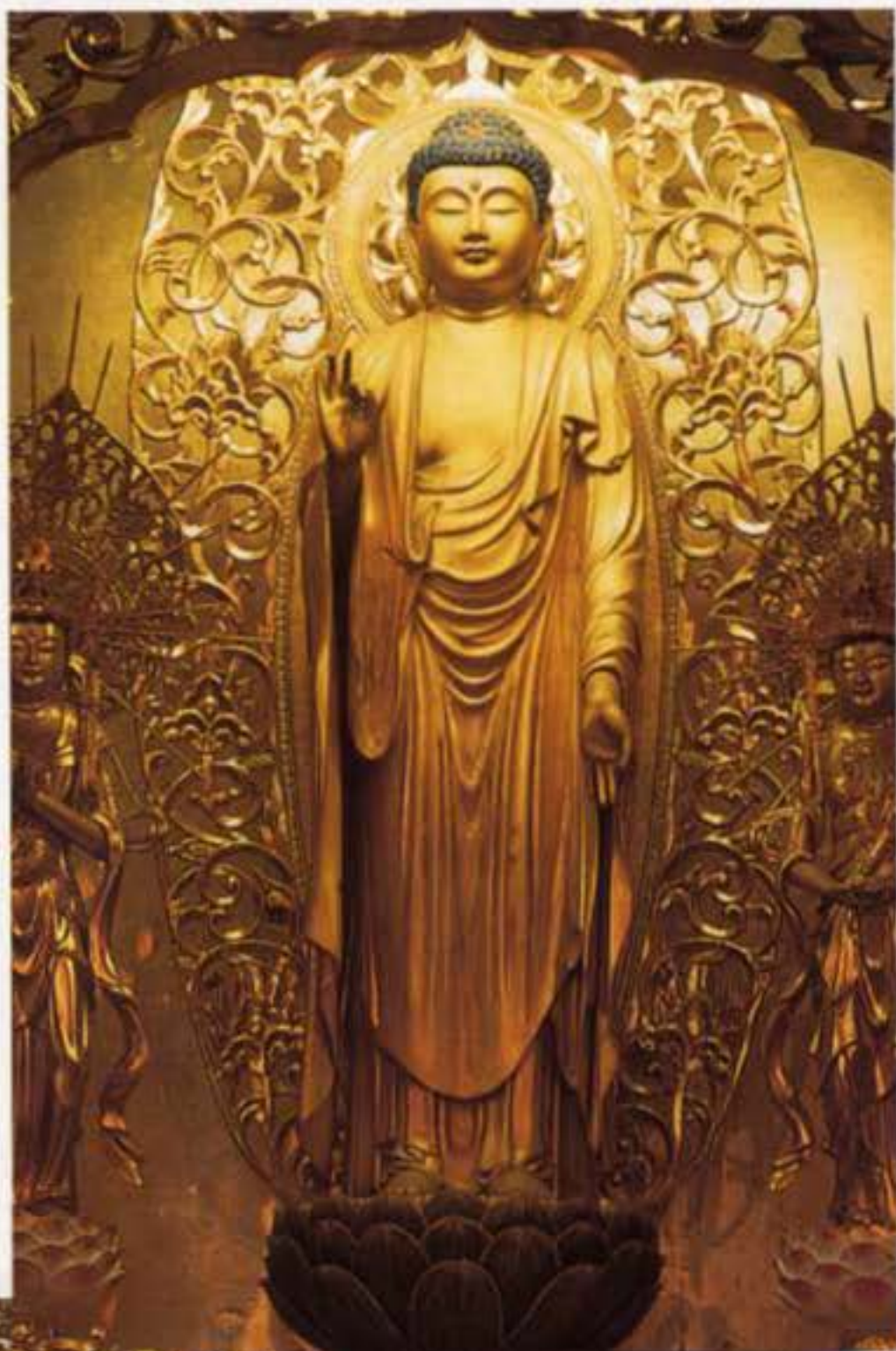
寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

佐賀・塩田

本應寺

本應寺第三十四世熊谷靖彦住職（左）と乗宗副住職。そして乗宗さんの子どもさん、宗紘くん（小三）と侑晟くん（小一）。撮影は乗宗夫人の幸子さん。下は本應寺本堂

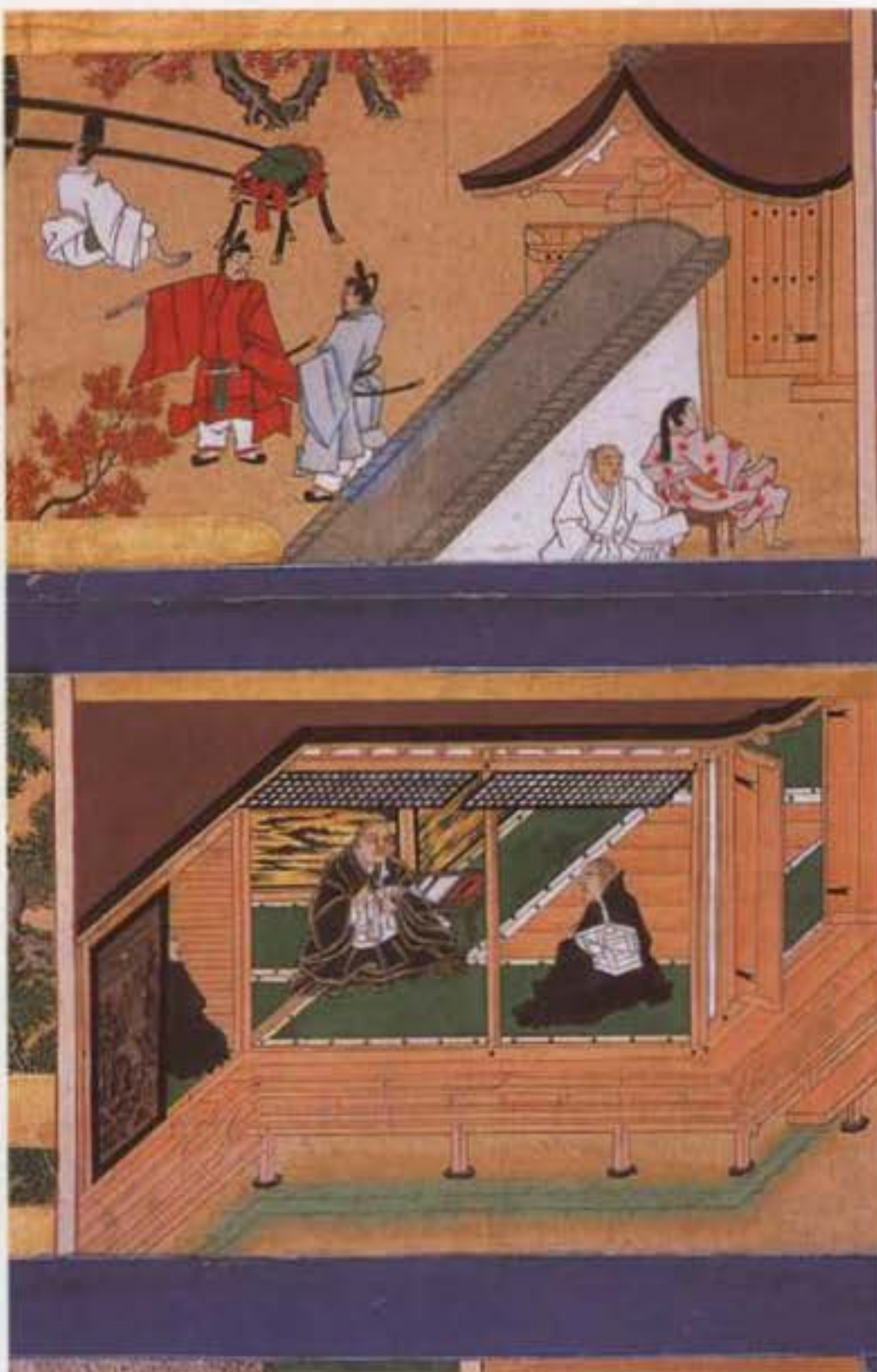




本應寺本堂内陣と本尊。本尊の阿弥陀如来像は鎌倉期のものといわれ、平成三年に修復された



法然上人の絵伝。二月の御忌法要には公開されている



寺宝の法然上人絵伝。八幅を本堂の左右にかけていただいた



かつては殿様専用として使われた客殿入り口。現在は人がたくさん集まる行事のときの入り口となっている



蓮池鍋島家の殿様用に作られた奥の間。一段高くなり、一間の廊下で囲まれている



客殿の天井裏には人形が並んでいる。昨年も大きな人形劇大会があり、住職は東奔西走した。左下には住職の絵が並ぶ



昭和三十三年四月から始まる法話ノート。中央右が雲迅抄と題された一冊目で左隣が二冊目。絵が好きだった住職が模様を描いている



有明海に注ぐ塩田川。干満差が六メートルある河川でこの川を交通路として塩田の地は古くから栄えた

浄土

2005/1月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 佐賀本應寺	写真=タカオカ邦彦	1
乱れる心とお念仏の道	佐藤良純	6
寺院紀行 佐賀本應寺	真山 剛	10
法話コラム	大室了皓	19
新連載 熊野古道を行く	森 清鑑	20
会いたい人 篠田正浩①	関 容子	28
響流十方	林田康順	36
日本酒のことば 日本酒のじかん	藤原理加	40
表紙のことば		42
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ「さっちゃんはネッ」	かまちよしろう	51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

式部良純

乱れる心と
お念仏の道

法然上人鑽仰会理事長

佐藤良純

人身受け難し 今すでに受く
仏法聴き難し 今すでに聴く
此の身今生において度せずんば
更にいずれの生においてか此の身を度せん

我々がこの世に生まれてきた因縁は、まことに不可思議なものです。

法然上人のおことばにも

「六道をめぐるに、人身をうける事は、梵天より糸をくだして、大海のそこなる針のあなをとおさんがごとしといえり」とあります。

雑誌『浄土』は、法然上人鑽仰のころざしを持つ人々によつて、生まれ難きこの世に、不思議な因縁によつて、昭和十年に誕生しました。それから七十余年、日本が経験したことのない、古今未曾有の太平洋戦争と、戦後の混乱期という試練を経て、人々の心の悩みをくみ上げ続け、安らぎの世界へ導いてきました。現代の言葉を使えば、まさに「ソリューション エージェンシー」の機能と役割を果たしてきたのです。

「心の悩み」それは人間にとって永遠の問題です。ただそれは、それぞれの時代によつて異なります。例えば、現代でも時々耳にしますが、

「今日は日が悪いから、何かをしてはいけない。どちらの方角に出かけてはいけない」

といったことは、平安、鎌倉の時代には大問題でした。法然上人の問答集を見ても、これらのことや、「ものいみ」についての答えが記されています。

現代の心の悩みで圧倒的に多いのは、人間関係についてです。ひきこもり、ニート（学校、会社、就職訓練所に行かない青年）、暴力、殺人、すべてが人と人との関係のもつれが原因です。それを「仮想現実の社会」が後押しをしています。テレビの画面をはじめ、ケータイのメール上では、ヴァーチャル世界がはばを利かせています。はじめは単なる映像として見ていたものが、次第に現実と混在し、ついには現実と虚像が判断できなくなります。メール上のチャットは楽しいけれども、マイナスの悪い面は表示されません。「メールの友人」と実際に出会ってみたときに、犯罪に巻き込まれ、こんなはずではなかったといっても、美空ひばりの唄の文句と同じように「あとの祭り」なのです。

こうした現実を見つめて、『浄土』は人々の心の悩みを解き明かしてゆかなければなりません。

「人はパンのみでは生きてゆけない」

まさにその通りです。しかし人はその食べ物でさえ足りているにもかかわらず、食べ続けているのは、地球の氷河時代、目にするものはなんでも食べておかなければ、生きながらえて行けないという記憶が、DNAに焼き付けられて消えないからだといわれています。アメリカでは肥満に悩む人が、胃の何分の一かを切除して食べられないようにする手術が行われているようです。さすがに日本では行われていませんが、「適当に食べればよい」という記憶が、人間の遺伝子の中に組み込まれる機会は生まれないのでしょうか。

「少欲知足」という言葉が經典にあります。確かに人間には「欲望」があります。性欲、物欲、名誉欲など数え上げればきりがありません。必要な欲望もあります。もし人に性欲が全くなければ、人類はとうの昔に滅亡していたでしょう。物欲がなければ、今日の快適な暮らしは成立しないでしょう。家を建てようという欲がなければ、我々は岩かげや木の下に住むよりほかありません。インドの出家修行者が、「樹下石上」の生活を送っていたことは經典に記される通りです。「衣は糞掃衣によれ」、つまりボロを継ぎ合わせ、掃除に使った布を袈裟として用いなさいという釈尊のことばは、「四依法」という出家者の基本的日常生活様式の中にはつきりと示されています。

ただし欲望が必要だからといって、無制限にそれを野放しにしてしまったら、社会はこれまた亡んでしまいます。

「時計の振り子」のことを考えてみましょう。どんなに大きくふれても、振り子は必ず元のところへ帰ってきます。振り切れてしまつては時計ではなくなります。振り切れた「時計の振り子」になつてはならないのです。

われわれは、現代という混迷を極めるこの娑婆世界を、どのようにして歩けばよいのでしょうか。

それは「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土に参りなん」と心に決め。そして「法然上人にすかされて地獄に行こうとも私は決して後悔しない」と思い、お念仏の道を進む以外、私たちに今を生きる歩き方はないと思っています。

寺院紀行

佐賀・塩田

本應寺

撮影／タカ才力邦彦

文／真山剛



鐘樓門として享保十六（一七三二）年に建立された。長崎街道からはちよっと見上げる高さにある

「雲迅抄」と題された一冊の大学ノートがある。

タイトルの下には法話原稿「No.1 迅誉朱白。開いた一頁目には小林秀雄の「信ずると云うこと」という一文が記されている。

実はこのノート、本應寺熊谷靖彦住職の僧侶としての最初の一步となる足跡、記念のノートなのである。

無量山寿経院本應寺は佐賀県塩田町に天正十四（一五八六）年、盛誉上人が創建した寺院で、現住職は第三十四世にあたる。

浄土宗僧侶にとって、自分が住職をしているお寺、自坊を守るのが第一だが、その上で布教活動のための布教師会、読経や法式を極める式師会、あるいは雅楽会や吉水講（詠唱）という組織があり、こうした組織に属し、そうした活動をする僧侶が少なくない。

熊谷住職もその一人で、永年にわたって布教に専念されてきた。浄土宗総本山知恩院、大本山増上寺の東西の総大本山の布教師会、そして地元の本山善導寺の布教師会に属しているが、知恩院の布教師会試験に合格したのが三十代という若さで、以来、知恩院の一週間にわたる輪番（布教）に十三回も出仕している。これは九州の布教師の中で最も多い。

「自らも「私は布教が専門ですから」とおっしゃられるが、人前で話すことの楽しさを覚えたのは少年時代のことだった。

熊谷住職は少年時代は華頂という姓で、生まれは昭和八年、現在



本應寺檀家の太田資信さんが編集した本應寺の寺史・精緻に関連資料を集め、工夫されたプロ顔負けの編集だ。表紙は熊谷住職による山門の絵。

の北朝鮮の開城（ケソン）で生まれた。父は浄土宗の僧侶で、本應寺の末寺である報福寺の生まれだったが、昭和の初め、当時は日本の領土となっていた朝鮮に開教師として赴任、何も無いところから一寺を立ち上げたのである。

開いた寺の名は善導寺。地元九州の大本山の名前をつけ、幼稚園も併設した。そして、そこで現住職を長男に四人の男子をもうけた。善導寺と幼稚園が軌道に乗ると、今度は同じ現北朝鮮の清津（チヨンジュン）の開教寺院に移る。寺院名は善光寺。長野出身の開教師がやはり地元長野の名刹の名前からとった寺院だ。

開城から清津に移ったのは、昭和十八年、靖彦少年が小学校四年の時だった。しかし、新しいお寺に移ったのも束の間、父は召集され戦地に赴くことになる。母と幼子四人が残された中、栄養失調で末の弟が病死する。靖彦少年は三歳下の弟と一緒に弔いの経をあげ、二人で弟の遺体を山中に土葬したという。

やがて終戦。母と兄弟三人の帰国の旅が始まる。百日をかけて、昭和二十一年の正月、命からがらようやく四人で帰国。だが、五つ年下の三男は帰国後二十日でやはり栄養失調で病死。さらに父のシベリアでの病死の報を受け、親戚である本應寺第三十二世熊谷察誠住職のところに身を寄せることとなる。

さて、この栄養失調で亡くなった弟の葬儀から始まる母子四人の



和泉式部公園から眺める塩田町。左端の山が本應寺山だ

石工の町、塩田の名工、筒井幸右衛門による阿弥陀如来坐像。
文政八（一八二五）年のものだ



山門脇の仁王像。仁王らしく憤怒の顔だが、親しみやすいユーモラスな雰囲気を出している

日本への帰国談を「三十八度線を越えて」と題し、塩田中学弁論部員の靖彦少年が校内の弁論大会で講演した。

この話に講堂は拍手と涙の渦に巻き込まれた。生徒はもちろん先生までが涙を拭うのも忘れ、手を叩き続ける。少年にとっては辛く苦しい百日間ではあったが、実際に自分が経験したことに過ぎなかった。それだけに会場の反応に一番驚いたのは靖彦少年自身だった。と同時に人前で話すことの楽しさをこの時、味わったのである。

進学した隣町の鹿島高校でも弁論部に入部、「三十八度線——」で佐賀県の弁論大会優勝、九州大会の代表にも選ばれた。

もちろんこの苦難の帰国談ばかり話している訳ではない。だが、こうした貴重な体験談は、机上で考えるありがちな青年の主張より人の心を打つ。いい意味で聞き手の反応に敏感になる。こうして若き日に人前での講演を繰り返した経験が後の布教師へとつながっていったのである。

そして、布教師への布石がもう一つ。大学時代に遡る。

東京への憧れもあり、靖彦青年は大正大学へ入学する。本当は絵を描くのが大好きで東京芸術大学に入りたかったが、三人の息子を戦争で亡くし、靖彦少年とその弟を養子に迎え入れてくれた察誠住職への恩を思うと、師のために芸大受験はあきらめ、仏教の勉強のために大正大学へと進んだのである。

本應寺の北、久間にある志田焼の里博物館。当時の建物をそのまま残す見応え充分の博物館だ



だが、大学へ入ったものの、先生の講義を聴いたのは一学期だけ。大好きな絵が描けるプロダクションに入ってしまった。

「学校へはほとんど行かずに舞台美術の仕事ばかりしていました。もともと好きでしたから、それは楽しかったですよ。ですから二回留年しました。この遅れている二年のうちに、大正大学に入学した三歳年下の弟がすぐ後ろ、一学年下まで迫って来たのです」

この弟さんは現在、北九州の名刹、善念寺に入られている。

「その弟が言うんです。『兄貴、できれば一緒の学年になりたいくないよ』って。弟は私を反面教師にして育ったのでしよう。それはまじめな男で、その弟に言われ、学校に戻ったようなものです（笑）」
 とはいえ、それまで授業は受けていない。試験前は友人のノート写しとカンニングペーパー作りとなる。

「ノートを写してカンニングペーパーを作る。この二回の書く作業でもう覚えているんですね。もちろんカンニングペーパーは持ち込みましたから、いざという時は見ますが、ほとんど見る必要がなくなってる（笑）。手で書くことが覚えることと気づかされたんですよ」

こうして「話と書」という布教の基礎が学生時代にできあがった。そして卒業、師僧察誠住職の「長男が継ぎなさい」という一言で、寺は弟に任せ自分は美術へ、という夢を捨て潔く寺に戻った。昭和三十三年のことだ。この東京から戻った跡取り息子に察誠住職は、



本應寺山の山頂にある本應寺歴代住職の墓。右手前が三十二世察誠上人の墓だ

すぐに試練を与える。昭和十一年に本應寺に入った察誠住職が始めた毎月二十五日の早朝法要での説教である。

最初の説教は寺に戻って一か月もしない四月二十五日。熊谷住職は初めての説教を大学ノートに書いた。これが冒頭の「雲迅抄」だ。以来、この法話ノートを欠かしたことがない。ノートからファイルにと形を変えたが、七十一歳の今も説教の度に必ず原稿を起こしている。

寒さが厳しくなった十一月二十五日の早朝五時半、本應寺本堂を訪れると、すでに二十人を超える檀信徒さんがいる。勤行後に住職の法話が始まる。経机にはきちんと法話ノートが置かれていたが、開かれることはなかった。内容は頭に入っているのだ。

さて、本應寺は家康の切支丹弾圧のために鍋島藩に遣わされた関東出身の盛誉上人を開山、その盛誉上人に帰依した華岳妙栄大師を開基とし、塩田津と呼ばれる河川の港に面して創建された。本應寺山と呼ばれる一山を寺領とし、その山腹に建立され、山上の歴代住職の墓からは遠く有明海も望める。また、参道は長崎街道に面する恵まれた立地だ。本應寺は知恩院を本山とするが、本應寺自身も延べで十七の末寺末庵を持つ巨刹で、現在も佐賀県下の浄土宗寺院の中で最大である。寺院の大きさのバロメーターにもなる檀信徒数も、地元塩田町、鹿島町、お茶と三大美白の湯で有名な嬉野町、千三百



寺の裏側の山腹にはグリーンガートと名付けられた新しい墓地が作られている。山腹のあちこちにある墓をこのなだらかな墓に移す檀家も少なくない

年の歴史を持つ古湯の武雄市、海苔とムツゴロウで有名な有明町、また遠くは県外の佐世保などに合わせて八百軒と、地方寺院としては相当な規模である。

「確かに今でこそ多くの檀信徒さんや末寺に助けられています、かつては無住時代もあり、歴代上人の墓や石工の町塩田ならではの石像などが雑草に埋もれていた時期もあるんです」

佐賀で有名な地という和有田や伊万里といった焼き物の町だが、ここ塩田にも志田焼きという焼き物がある。現在は本應寺の保育園となっている敷地も、ついこの間まで登り窯があつた所だ。また天草の土が船で塩田川をのぼり、加工され有田へ運ばれる。実は今でも有田焼きの八割の土をここ塩田で加工しているのである。

また塩田は山田錦がとれ、塩田川の清流と相俟って美酒が造られている。本應寺の檀家でもある造り酒屋東長がその筆頭で、マツカ―サーに愛され、隣の分家、東一も全国に名をとどろかす蔵元だ。この酒蔵の向こうに和泉式部生誕の地と言われる五町田が広がり、一面に広がる水田を見下ろす高台に和泉式部公園が作られている。

また、この塩田では人が集まった様子を「本應寺の施餓鬼のようだ」と表現する。八月二十八日の本應寺施餓鬼には僧侶だけで四十人集まり、参道、境内には露天商が並び、地域の人でこった返す。山門脇の愛嬌のある仁王様がよりいっそう優しい顔になる。



本應寺の太極拳教室の発表会での記念写真。立っている左端が先生の江さんで、左端壇上に座っているのが住職夫人の晶子さん。平成十四年多久市の孔子まつりにて

また本應寺では御忌、春秋両彼岸、十夜法要は五日間にわたって行われ、お説教師さん専用の部屋があるのだが、居間、寝室、トイレ、風呂がそろっていて、プライベートが守られる空間になってる。布教師ならではの熊谷住職の心配りだが、本應寺にお説教にくると勉強できると喜ぶ布教師さんもいるそう。自らが布教してきた経験からの熊谷住職ならではの心配りだ。

また熊谷住職は人形劇にも長く携わっている。舞台美術経験がここにも活かしているのだが、佐賀県人形劇協議会会長、人形劇団「かちがらす」代表などをつとめ、今でも現役で人形を操っている。倉庫には人形、舞台道具、そして趣味の絵画の道具などがところ狭しと並んでいる。「好きな絵を描くことは趣味になりましたが、好きなことは趣味ぐらいがいいですね」と人形を片手に微笑まれた。

また学生時代、巣鴨で占いのおばあさんの家に間借りをしていたこともあり、命名の達人(?)。子どもはもちろん孫の名前も、また近所の子でも住職に命名してもらった子どもがたくさんいる。

「私の宝は孫ですよ」という熊谷住職。

本應寺は現住職までは世襲ではなく、弟子の中から次の住職が選ばれてきた。しかし、これからはどうやら世襲となりそう。長男乗宗さん、孫の宗紘くん、侑晟くんと熊谷住職命名の僧侶へとその法灯がつながっていくのだろう。

(ルポライター)



布教師さん専用の部屋。客殿と仕切られ、五日間布教の勉強に集中できる環境になっている

何のために生きているのだろうか。

若いうちはまずお金を手に入れるために働く。お金がなければ生きていけないからだ。

家庭を持てば一家の生計を立てるために。子供が生まれれば丈夫に育ち、一人前の社会人になるまでは親の責任だとして、全てを子供のために汗を流して生きる。

やがて親のもとを離れ、社会に出て行く我が子の姿を見送ると、長年の苦労を振り返りそれが実った喜びを持つものの、既に四十才も半ばを過ぎた自分の年に氣付き、これからの長い人生は何のためか、とふと考え込んでしまう。

仕事に精を出すのは当然だが、それは生きるための手段である。

小雀たちが庭にやって来て餌をついば

む。何のために。生きるために必死だ。ほかに理屈はない。

お乳を求めて母親の乳房にしがみつく赤子。理屈はない。ただ生きるためだ。

何のためにという理屈は、彼らには無用だ。

人間は彼等と違って知識を積んでいるが、その知識に惑わされて本質を失ってしまう。

なぜ生まれたか。分からない。

生まれたからには、命を頂いたからには、真っ直ぐ生きねばならない。

今日を立派に生きるために生きているのだ。

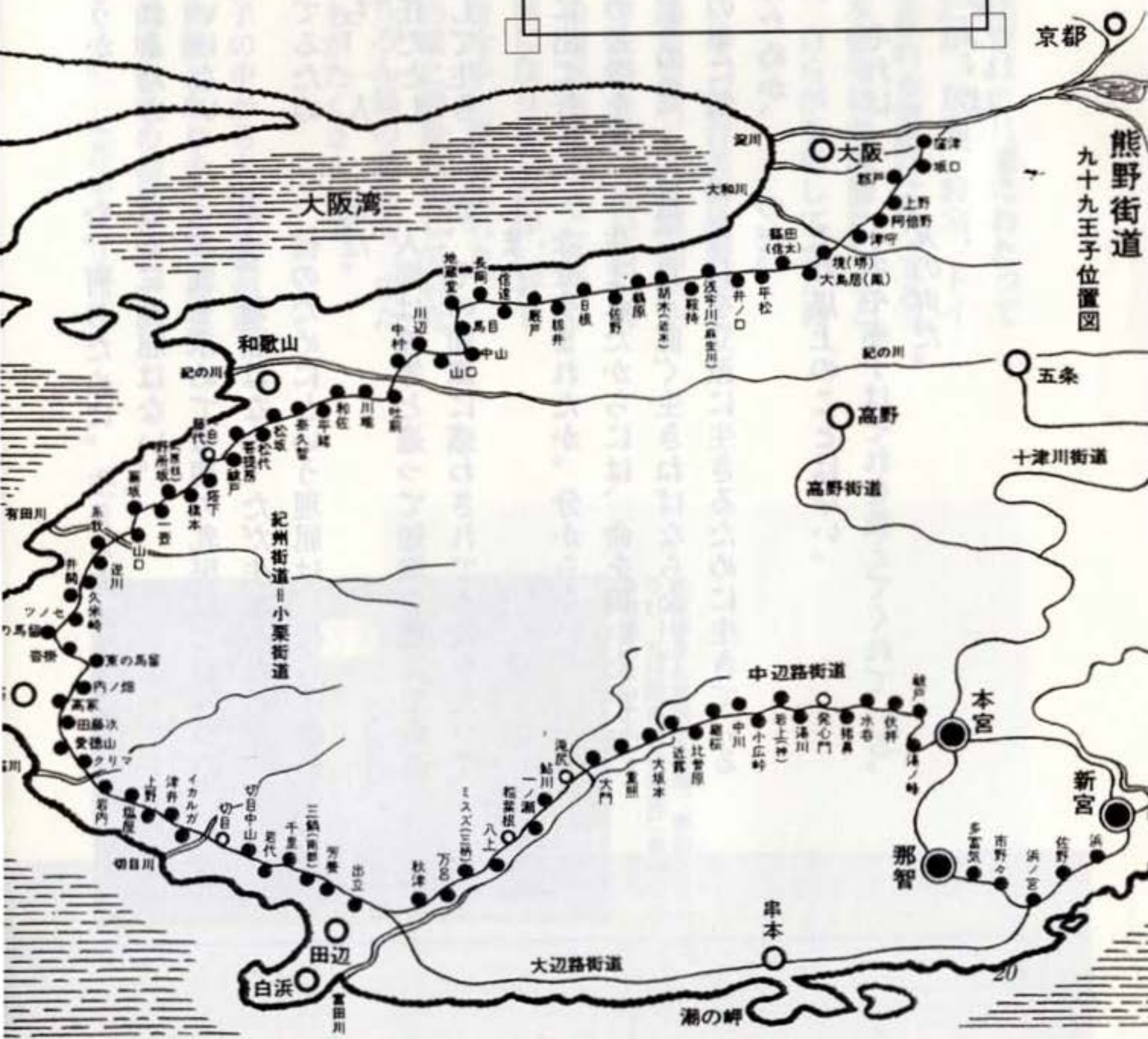
それ以上のことはない。

小雀や赤子はそれを教えてくれている。天の声だ。

を行く

第一回

森清鑑



熊野古道への旅は日本人の心を探る旅でもある。われわれのDNAには「自然との共存」思想が残っており、それ故に自然を敬い、自然に身を託すという思想が心のどこかでまだ息づいている。熊野古道を織り成す果無山脈は、そうした日本人の古くからの心の故郷であるとともに、熊野権現様、すなわち阿弥陀如来様のおわす所であり、神仏混淆が見事に融和して存在している世界でもある。ヨーロッパでは、ドルイド信仰が一掃され、アニミズムが否定され、人間社会の回復のために自然を犠牲にした結果、森が消失してしまった。その結果ペストの流行など手ひどい仕打ちを受けたのである。熊野の森は人間の利便性を第一義に考え、開発の末に自然を保護するという歴史的経過とは言わば好対照の世界であった。しかし、明治維新以降の西欧思想化と高度成長経済下での物欲主義により、伝統的な日本人の自然との共存についての心象風景はかなり怪しくなってきた。熊野の森は昔の

原生林ではないかも知れぬが、しかし、われわれ現代日本人にとっても、ふと心に懐かしさを想起させるものがここにはまだ存在する。ここはまた、森林で云えば、南の植物群と北の植物群、海洋で云えば、南洋と北洋の、深海と浅い海の合体地点でもあり、南方熊楠ではないが、自然科学的にも稀有な存在でもある。古の人々はそのような自然環境のことは知らずとも、この地になにがしかの「神秘さ」を感じ、幾千年と精神文化を刻み込んできたのではなからうか。

熊野古道は、大阪から和歌山湾沿いに下り、田辺から山に入り熊野本宮大社を目指す「紀伊・中辺路（なかへち）」、高野山から本宮を目指す「小辺路」、和歌山県の海岸沿いをぐるりと回る「大辺路（おおへち）」、それに吉野から熊野に至る大峯奥駈け路、伊勢路などがある。今回は、平安時代に法皇や上皇が熊野御幸を頻繁に行った、紀伊路・中辺路を中心に探訪した。

紀伊路から中辺路へ

熊野詣は、大阪の天満橋から始まる。平安時代に上皇の一行は、京都から船に乗り、淀川を下って天満橋に到着した。淀川は京の都と流通拠点を繋ぐ重要な輸送路で歴史の多くの出来事が天満橋から始まっている。往時、淀川は大阪に近づく、網の目のような大きな州を形成しており、その自然の入り江は、美しくも茫洋とした沖の百万坪と形容できる存在であった。現在のコンクリートで固めた河からは想像もできない自然美がそこには在ったのである。輸送路としてみると、京の都から入る荷、また都に運ぶ荷を積んだ小船がひっきりなしに行き交っていたに違いない。大阪の天満を押える者は天下を取る。世人がこう形容したのも頷けることではある。

楠正成の元弘三年の役、四年後の小楠公正行の戦が繰り広げられたところでもある。古戦場碑を見るまでもなく、あの役では彼らは

ここを死守したわけである。また、信長が史上名高い石山本願寺攻めをした際にも拠点になった処である。このような歴史上において重要な地勢は、そうめったに在るものではない。ゆえに、ここ近江の地からは幾つかの物語が湧出している。渡辺綱の鬼退治の話。彼は武蔵の三田（慶応大学の近く）で生まれ、この大江の地を守り、全国にその名を轟かせた。遠藤盛遠が袈裟御前を見そめた、名作「地獄門」で知られる渡辺橋の「渡りぞめ」の地でもある。

江戸と同様に難波津の自然は激変している。五世紀の頃には河内潟が現在の大阪城を取り囲むように広がっており、北西の方角から淀川が潟に入り込み、東からは大和川が幾つかの文脈となって同じく潟に流れ込み、流速の潮を生む。流速の地名の起源である。しかも塩水と真水がぶつかり合い、江戸前と全く同じ、美味な魚の宝庫であったに違いない。ただ、江戸と異なるのは文化が早く開けたこ

とにある。初めに古代帰化人の文化がなだれ込んできた。奈良文化が大和川から運ばれてきた。京の都からは淀川が文化を積んできた。

しかも近畿台地が潟になだれ込むように突出した地形。その突端部は急峻にせり上がっている。ゆえに天蓋の要地となった。古代難波宮があり、対岸の小島には東大寺領新羅江荘があった。後に折々記すが、日本の古代はアメリカ並の人種の坩堝であり、奈良時代はとりわけ百済と新羅の抗争が激しく、その動きは鎌倉時代まで続いた。鎌倉時代を経てようやく日本の統一概念が誕生した。古代新羅江荘が置かれていた事実、新羅がこの地を制していたことになる。難波宮の後に石山本願寺が、そして大阪城が構築されたのである。

大阪城のふもと。淀川に面する入り江の港州。そこに荷の運搬と宿を兼ねた幾つかの家屋が立ち並んでいた。それが天満橋の八軒家である。江戸時代の古図絵を見ると、多くの人びとが行き交い、岸に付いた船から米俵な

どの荷を下ろしている。賑わいは入り江の大自然の中に息づく民衆の声が聞えるかのようだ。十返舎一九の弥次喜多道中の舞台であり、森の石松の「鮎食いねえ」の現場でもある。熊野詣が始まった平安の御世も輸送問屋を兼ねた宿が数軒在ったに相違ない。

延喜七（九〇七）年、皇家では宇多上皇がはじめて熊野詣を挙行したという記録がある。上皇も京から大淀の流れに乗って、想像もつかぬ美に耽溺しながら船着場の八軒家に到着した。船宿が八軒在った、ということから八軒屋の地名が残っているが、それが果たして何時の時代からそう名付けられたのかは分からない。具体的な数を示している地名から察するにおそらく江戸時代であろう。しかし、その場所柄は平安時代と一にしていることは間違いがない。乱立するビルディング群、行き交う車の騒音、近くを流れていてもまるで見えぬ淀川。まさにコンクリート・ジャングル化した、ある高いビルディングの玄関に

八軒屋の石碑だけがぼつんと建っている。東京の、人形町玄治店の石碑と全く同じ状況である。熊野詣の人々はここで宿をとって翌日出立したに違いない。この辺り、人々は淀川の入り口、すなわち、大川の入り江、大江の郷と呼んでいた。ここから大阪城は至近距離でせり上がった高台にある。大江から坂を登った所に城はある。そこから大江の坂。なま

って大阪の地名が誕生したといわれる。

八軒家の東の交差点に「熊野かいどう」の銅版が立っている。その地図では、八軒家浜から四天王寺を経て、大和川を渡る路が描かれている。この角、土佐堀通りを左に折れ、5分ほど歩くと、最初の王子社窪津王子がある。窪津王子は今では座摩神社と合祀されている。木に囲まれた、小さな神社と当時の礎石であろうか、黒光りした石盤が祭られている。熊野古道はここから那智大社大門坂麓の多富気王子までの九十九王子社を縫っている。巡礼の目的は熊野本宮、すなわち権現様

へのお参りである。

熊野権現は極楽浄土をおさめる阿弥陀如来が姿を変えたもの。その子供神が王子で九十九王子社を訪ね歩いて権現様に到達する。往時、王子社は休憩・宿泊所であり、祭事、歌・踊りなどの都芸能の伝播地でもあった。人々は極楽浄土を願ってこの難行苦行の詣参りをしたのである。熊野詣、古道の歴史は、日本文化の原点であり、法皇、上皇が詣の旅を始めてから大きな流行になり、平安、鎌倉

「熊野かいどう」の銅版



には頂点に達した。そして平安時代の皇族、公家が没落し、代わって一般庶民の熊野詣がさかんになり、鎌倉時代以降には、蟻の熊野詣なる盛況を見せた。

窪津王子からわずかな距離に坂口王子、高津神社（合祀）がある。高津神社の傍には近松門左衛門の墓がある。古道はいくつかの王子社を経て、四天王寺に出る。西門の石の鳥居は一二九四年建立のものでわが国最古の大鳥居の一つである。昔この門の先はすぐ海でそこに陽が沈む夕陽丘は極楽浄土の入り口とされた。「夕陽丘」は古い地名なのである。

四天王寺は約一四〇〇年前、聖徳太子建立による日本仏法最初の大本寺である。太子も蘇我氏も百済系であったので仏教を支持した。四天王寺の北東一、二kmの所にあった百済からの帰化人墓、遺骨の移葬・改葬の地に建立したらしい。法隆寺と同じ伽藍配置の四天王寺はこのように歴史的に大きな意味を持って

いる。それは人種混合ともいえる文化の波の接点である。

極楽浄土のシンボルであった五重塔を西門から右へ回り込むと南大門がある。昭和三十三年に南大門と本堂の中間に三〇センチ地中に埋もれた礼拝石（遥拝石）が発見された。長さ三メートル、幅一メートル程度の板石で上皇一行も石の上に礼拝物を置き供物を揃え、お払いし南大門に向かって熊野詣の無事を祈願したらしい。

熊野街道は四天王寺から**阿倍野**に続く。阿部の辻とかこの辺りは阿部の名跡が多い。有名な阿部一族の領地であった。阿部一族の本拠は斑鳩であったが海沿いのこの地が言わば出店に近い領地で、大きな勢力を持っていたことは窺い知れる。古道には往時を偲ばせる、古民家がちらほら建っている。古道の道幅は広くて畳二畳、約四メートル、普通は三メートル、狭いところでは二メートル程度であったらしい。



安部晴明公産湯井の跡

天王寺駅から阿倍野に入る古道は大阪にし
ては奇異な感じがするほど興味が有り、入り
口には「熊野かいどう」の石碑が立っている。
その道幅は古道を代表するもので和歌山まで
は、ほぼこれと同じ道幅であつたに相違ない。
四メートルはあろう。両サイドに古い黒塀な
どもあり、古民家を含めてそれとなく古道と
分かる。松虫通りを突っ切ると安部晴明神社
がある。占いで有名な彼の生誕地とされ、産
湯の井戸が残されている。晴明は平安中期に

活躍した人物。当時は海がもっと近く、港を
活用する阿部一族にとり奈良時代から重要な
拠点であつたと思われる。清明はここに根を
下ろした一族の末裔として生を享けたと思わ
れる。大陰陽師としてその占い術が現代に再
び注目されている、天文暦学の大家である。
このちよつと先に**阿部王子神社**がある。この
王子社は、昔のなごりを最もよく残している
王子社のひとつである。社の左側にナギの木
があり、その葉が榊である。古来、ナギの木
は神木とされ、ゆえに葉のついた小枝を捧げ
る風習が今日も残されている。

堺の地名は、摂津と大阪の境界ということ
から発祥した。新羅からの帰化人が早くから
住み込み、文化の先端を行っていた。戦乱の
世には鉄砲職人の町としてその名を轟かせた
が文化的にも多くの起源となるものを残して
いる。浅香山を過ぎると、三国ヶ丘、百舌町
に出る。そこには、**仁徳天皇陵**、**履中天皇陵**
といった著名な古墳群が乱立している。以前

に、仁徳天皇陵を見るために三国ヶ丘に宿をとった。夕暮れ時に天皇陵をぐるりと回り、その巨大さを充分に堪能した。環濠に囲まれた原木の木々は美しくもまた威厳がある。百舌側に正門がある。仁徳天皇の御世は五世紀とされているが確かではない。台風で一部が破壊され土器などの埋葬品が露出したが埋め戻されたという。多くの天皇陵が発掘できない状態にあるが仮に研究されとなれば新事実が目白押しという事態が招来するであろう。もともと大多数の古墳群は平安時代の頃にはすでにあらかた盗掘されていたというが。この天皇陵が実は履中天皇のものではないかとの説もあるらしい。が、いずれにしてもその巨大さは改めて目を見張るもので古代の土木技術に驚かされる。正門からぐるりと回ると大阪女子大側に歌碑が立っている。仁徳天皇の妻の歌で確か「恋しいあなたの帰りを門で待つうちに睫に霜が積もってしましました」という意味であったかのようと思う。

およそ一六〇〇年の時の流れを一瞬にして埋める、のびやかな歌だと感嘆した。堺市役所側の仁徳天皇陵環濠に沿った道はどことなく風情があり、しばし佇んだことを覚えている。実はこれが熊野古道であったのである。ともかくこのあたりは知られていない古墳があちこちに点在している。大阪の南と堺は神武天皇陵以下多数の天皇陵もある。この辺りが天皇家にゆかりの地であったことを示しているのではなからうか。仁徳天皇陵は堺市役所から見ると真横に長く見える。市役所から西はすぐに海だったはずで海側の一帯が栄えていた。天皇陵はそこに住む多くの人々から見えて、偉容な景観を印象付けるように計算された設計になっていると思われる。

(つづく)

連載

田篠正浩

会いたい人
関 容子

正浩
さん



①

篠田監督は、私がフリーランスの雑誌記者だったころ、困ったときの駆込寺みたいな存在で、いつも切り口の鮮かなコメントをもらえる有難いお得意さまだった。たとえば、「男にとって女の美醜とは」などという女性誌の特集にも、「姿形にはまったく捉われない、と割切れるのも男、しかし捉われてしまうのも男」といった含蓄のある回答で、さすがに美女岩下志麻を夫人に持つだけあってかっこいい、と思ったものだ。

だから監督の作品は、日本のヌーヴェル・バーグの旗手といわれたころの初期作品は残念ながら見逃したものの、その後はほとんどを公開当時に観てきている。『心中天網島』『桜の森の満開の下』『瀬戸内少年野球団』がとりわけ好きだが、最近観て圧倒された『スパイ・ゾルゲ』をもって最後、と聞くのは何だか寂しい。まだ情熱も体力も枯れているとは思えない監督が、なぜそんな宣言をするのだろうか。

「映画を撮つたらまず観せたい、と思った生涯の友がこの世にいなかったからですよ。デヴィュー当時の『乾いた湖』という作品は六〇年安保の紛争を描いたものですが、そのシナリオを私は弱冠二十四歳の寺山修司にまかせて、音楽は武満徹に依頼しました。この二人と出会ったことが、映画監督としての私の生涯で最も刺激的な出来ごとになったんです。武満はそのころ既に前衛的な無調の音楽を発表していましたけれども、この映画で寺山のシナリオの文体にマッチするような短調とも長調ともつかないブルースに着目して、素晴らしい作曲をしてくれたんです。その後も武満とはずいぶん組んで仕事をしましたし、逆に彼の音楽に触発されて、近松門左衛門に取組んでみようと思ったりしたこともありました。その武満も、それより前に寺山も、いなくなってしまうしたからね」

しかし篠田さんはこうも続ける。
「この間、思いがけなくドナルド・キーン先

運 載

田篠 人



岐阜県立第二中学（現岐阜県立加納高校）の二年生、十三歳当時の篠田監督

1

生から『ゾルゲ』を観てとてもよかったという自らの日本文字で手紙をいただいてすごく嬉しかったです。現在八十二歳のキーンさんが大学一年のころ、スパイとして逮捕された女性に会ったことがあるそうで、当時の知人の中には共産主義の良さを信じる人が何人もいた、ということでした。ゾルゲ事件のことは漠然と覚えていたけれども、今回、映画を観てまったく新しい感じがした。親しい友人の安部公房は、国家主義がある限り平和はあり得ないとよく言っていて、やはり司馬遼太郎さんも同意見だった。『スパイ・ゾルゲ』はまさにその国家主義を批判していて、私は篠田さんにどうしても感謝を表わしたくなりました……と、こういう文面でした。まあこれで苦勞した甲斐があつたなあ、と思いましたよ」

篠田さんはかねがね、歴史は敗者に添って見つめるとよくわかる、と言っている。しかし昭和という時代の歴史的叙述をスパイの眼

を通して行なおうということは、これまで誰も考えなかったことだと思う。

「昭和が終つたときに、昭和がどんな時代だったかをパツとひと眼でわかる映画を作りたいたと思つたんです。それも小津安二郎のとつた方法じゃなく。つまり小津さんは昭和を生きた庶民の生活を描いてますが、政治はいっさい描いてません。ゾルゲの映画を作ること、改めて日本という国に生まれついた不条理を見つめてみようと思つた。私は昭和六年に生まれたので、まったくの皇国少年、今で言えば極右思想にスッポリはまっている少年でした。当時としては選択の余地はなかったんです。ではいつから自分を選択したのかといえ、敗戦によつて初めて国家主義から離れられたときです。そこでようやく日本がよいとおしいと思ひましたね。この負けた日本をこれからどうするんだらうと思つて、あの戦争で日本人は三百万人が死んで、この人たちの魂は誰が弔うのか、と本気で考えました。

私が日本人であるという宿命を呪わないで、その条件の中で日本を研究しなければいけない、と思った。ゾルゲも尾崎秀美^{はつみ}も、スパイとか売国奴の汚名でののしられて、魂はさまよい続けるままでしよう。だから誰かが拾ってやらなければ、と思ったことも事実です」

篠田さんの描くゾルゲと尾崎秀美は、共産主義を信じて国家主義と対抗し、政治を動かそうとして敗れ去った悲劇の人なのだ。

篠田さんは岐阜県の生まれ。父方は代々漢籍に親しみ、中山道を往来する頼山陽の息子の三樹三郎や山岡鉄舟、富岡鉄斎と知遇を得るような家柄だった。しかし末っ子だった篠田さんの父は水力発電の事業を起して挫折し、その後は「小さな町工場を経営していた」という。

「父は毎日のようにオートバイの後ろに母を乗つけて、岐阜の町を乗り回してました。かなりポップな人だったんですね（笑）。父の

部屋には設計用の机があつて、いろんな機械が置いてありましたけど、その中にイーストマン・コダック社の映写機なんかもあつて、たまに自分で撮ってきた旅のフィルムを上映するんです。それより私たちは早く『ミッキーマウス』のマンガ映画が観たいんですが、それは最後のお楽しみでした。兄や姉たちは、クラシック音楽が好きで、毎日のように大型の電蓄からベートーヴェンとかモーツァルトの音楽が聞えていたものです。友だちの中には、レコードというものを私の家で初めて見た、と言ってるやつがいて、まだそんな時代だったんですね」

篠田さんが、ピアノが弾けることを知って、いつか私も驚かされた覚えがある。戦中派の、しかも男の子にピアノを習わせる家庭なんて、相当な文化程度の高さだから。

「母は、父とは見合いで結婚して九人も子供を生んで育てたんですから、昔の女の人はすごいんですね。しかし戦争中に三人の娘を次々



早稲田大学では陸上部に入部。正月箱根駅伝では花の二区で新人ながら五人抜の活躍を見せた。監督は名将中村清監督だった。最前列右から三人目が篠田監督

に結核で失くしたり、戦後の困難な時期に四人の子を東京へ送り出して大学教育を受けさせたりしたんですから、桁はずれの心労と苦勞を背負ってたんだと思います。そのせいか、短命で、五十四歳で亡くなってしまうした」

篠田さんには今も大切にしている母の思い出があるという。

「私が中学に入ったとき、これからは勉強が大変になってあんまり遊ぶ暇もなくなるだろうから、と言って……決してそんなことはなかったけど（笑）、映画館に連れてつてくれたんです。母と二人きりで映画館の椅子に座ってワクワクして始まりを待っているときに、こういう空間を与えてくれる映画館っていいものだなあ、とつくづく思ったんですね」

こうして映画監督へのレールは着々と敷かれていくのだが、篠田さんがその後早稲田大学の演劇科を選んだ理由、というのがまた非常に理路整然としている。

「終戦後、母がまるで飢えてた人のように

次々に歌舞伎を観に連れて行ってくれたんですが、それで最初に私の眼を開かせてくれたのが二代目鴈治郎さんの『時雨の炬燵』（近江半二）だったか、『曾根崎心中』（近松門左衛門）だったか、と思いますけど、とにかく廓から抜け出して道行になったときに、心中者がなぜあんな紋つきの立派な衣裳なのかと思つて、突然ああこれはお葬式の演劇化が始まつたんだ、とわかつたわけです。死者の靈を弔うこと、非業の最期を遂げた人が弔われている、祟りを怖れて魂を鎮めるために日本の芸能はあるんだ、と思つたんですね。能も歌舞伎も死者の演劇なんだから、それを勉強すれば日本に出会えるんじゃないかと思つて、それで演劇科に入ったんです」

篠田さんは大学一年のとき、駅伝の選手に選抜されていい成績を上げたそうだ。

「一年生だし補欠でしたから、出場はあり得ないと思つていたら、監督が私に二区に行く

ように命じたんです。鶴見から戸塚までの花の二区と言われる区間を走るわけですが、その年は結局早稲田は二位でゴールインしました。新聞には、往路の新人選手の意外な健闘がもたらした成果、と書かれていて、つまり私が褒められてたんですね（笑）。五人抜き

しましたから。それであとから監督に、なぜ補欠の私を走らせたんですか、と訊いてみたんです。すると、経験を重ねた上級生たちだけを選んだら、彼らは無理をしないで確実にペースを守って走るからうちのチームは多分七位か八位だったろう。しかし一年生のお前は自分は自分の限界を知らないから、張り切つて最初から飛ばして走り切るかも知れない。もちろん裏切られるかも知れないが、そつちに賭けてみようと思った、ということでした。この名監督は、のちにマラソンの瀬古利彦を育て上げて、日本の長距離を世界的なレベルに高めた中村清監督だったんです。この考え方は私が映画監督になつて、キャスティング

を考えるとときなんかにも大変役に立ちましたね」

つまり名將は、この青年の向うつ気を見抜いていたのだ。

篠田さんは駅伝の区間を走り抜けながら、沿道の風景が一瞬一瞬眼に飛び込んできては消えていく時間の流れが、映画に似ている……と思ったかも知れなかった。

「ええ、たしかにそれは思いました。向うに見える山とか、沿道で振られている小旗とか、道に落ちてる何か、とか。それを文章で描写していたらものすごく時間がかかるけど、映像だと走つてると同じ速度でそういうのをみんな描写していくことができる。何かにつけて映画というものにだんだんと引き寄せられて行つてたんだと思いますね」

（つづく）

無礙光むげこうとは、この界の日月灯燭等の光のごときは、一重なりといえども、物を隔てつれば、その光徹ることなし。(略)しかるに彼の仏の光明、かれこれそこばくの大小の諸山を徹照して、この界の念仏の衆生を攝取したもうに障礙あることなし。余の十方世界を徹照したもう事もかくのごとし。故に無礙光という。

(『逆修説法』)

阿弥陀さまが放たれる無礙光についてですが、この世界の太陽や月、灯火のような光は、たとえ薄いものであつても物を隔ててしまえば、それに遮られてその光が通ることはありません。(略)しかし、阿弥陀さまが放たれる光明は、(はるか西方の浄土からこの娑婆世界まで)あれこれ多くの大きささまざまな山々をも貫いて照らされるので、この世界で念仏を称える人々を救い取られるのに何ら妨げはありません。その光明が、すべての方角に広がるあらゆる世界を貫いて照らされるのも、こうしたありようからです。ですから、阿弥陀さまが放たれる光明を無礙光と申し上げるのです。

無礙光——今も、すべてのものを買いて——

「どうして小柴先生はノーベル賞をもらえたんですか？」

「それはね、ニュートリノというものを発見できたからだよ。」

「ニュートリノってどこにあるんですか？」

「私たちの目でニュートリノを見ることはできないんだよ。けれど、今もあなたのお家や身体の中を数え切れないほどたくさん通り抜けているんだよ。ニュートリノは、鋼鉄やダイヤモンド、どんな固い物でもスイスイ通り抜けてしまうんだよ。」

ラジオから流れてくる子供電話相談で何気なく耳にした会話です。言うまでもなく声の主は、ノーベル物理学賞を受賞された東京大学名誉教授・小柴昌俊先生で、お相手は小学校二年生の女の子だったと記憶しています。一九八七年、神岡鉱山の地下千メートル、小柴先生がリーダーとなって建設したカミオカンデにおいて、小柴チームは大マゼラン星雲に出現した超新星から飛び出してきたニュートリノ検出に成功しました。これまで理論的にしか語ることができなかったニュートリノの検出は、天体の観測や宇宙の進化を明らかにする新たなニュートリノ天文学の地平を開いたのです。「たいしたものだなあ」と小柴先生の業績にあらためて感心しつつ、冒頭の法然上人のご法話が脳裏をよぎりました。このご法話は、阿弥陀さまのお身体から放たれる光

明が具える十二種の功德の内、いかなるものをも貫き通すという「無礙光」^{むげこう}について
の法然上人による尊いお示しです。なるほど、法然上人御在世の八百年前には、太陽
や月、灯火の光を超えた「無礙」の働きを具えたものなど具体的には例示できなかつ
たのかも知れません。しかし、そうした状況にあつても法然上人が、阿弥陀さまの
「無礙光」の功德を疑うことなど微塵もなかったことでしょう。

それに比して現代社会は、ニュートリノは言うに及ばず、紫外線や赤外線はもちろ
ん、携帯電話の電波など、私たちの目に見えず、あるいは、さまざまな物質を通り抜
ける働きを具えたものが次々と解明され、実用に供されています。最新の報道では、
離れた二箇所の粒子が瞬時に影響しあうエンタングルメント理論の実験が成功し、量
子テレポーテーションの実現に期待が高まっているほどです。

それにもかかわらず私たちは、現代文明に足をすくわれ、浅薄な自分たちの知識に
目を曇らされ、科学的に説明し得るものばかりをもっともらしくいただくばかりで、
阿弥陀さまが放たれる光明の働きには見向きもしないありさまです。中には「所詮法
然上人も八百年前の方だから、あのようにおっしゃったに過ぎない。科学の進んだ現
代は、それに見合った阿弥陀仏や浄土を論じるべきだ。今後ますます科学が発達すれ

ば、阿弥陀仏や浄土を合理的に説明できるようになる」などと口にする方までいる始末です。しかし、こうした考え方は本末が転倒しています。法然上人のお示しは、科学が進歩していなかったから、やむを得ずああいった形でお説きになったものなのではないでしょうか。私たち現代人が到達している文明はそれほど自慢できるものなのではないでしょうか。少し冷静に考えれば、決してそうではないとお分かりいただけることでしょう。

そもそも、科学文明の発達とお念仏の教えとを同次元で論じようとする前提が間違っているのです。ニュートリノの発見やその存在は、阿弥陀さまの「無礙光」の功德を伝える格好の比喻として受け止めるべきものなのです。さらに言うならば、それこそ世の中がとんでもない事態になってしまふことを充分お見通しで、あえて阿弥陀さまは、ご自身やそのお浄土が科学的に証明されないようにしてくださったのでしょう。

先日、傷みが目立ってきた駐車場のアスファルトをおよそ四十年ぶりに上から敷き直しました。後日掃き掃除をしていると、ドクダミがその間を縫って威勢良く芽を伸ばしているではありませんか。ひとしきりその生命力に感動し、八百年前も、そして今現在も、いかなるものをも貫いて、私たちに救いの光を照らし続けてくださる阿弥陀さまに向けてお念仏をお称えしました。

合掌

(大正大学専任講師・林田康順)

日本酒のことば

その四
お燗
燗上がり

読んでみると、無性に日本酒が飲みたくなる小説、というものがあります。最近では、『本の旅人』（角川書店）という雑誌でインタビューさせて頂いた、久世光彦さんの『曠吉の恋 昭和人情馬鹿物語』（角川書店）が、とびきりの、そんな小説でした。

「卓袱台には湯豆腐と鰯の鍋が湯気を上げ、他にも竹の子の木の子の芽和えの皿や、小松菜のお浸しの小鉢が並んでいる。気が向いたときだけ台所に立つお涼の手料理だが、長年の芸妓暮らしの割にはなかなかの腕だった。長火鉢の鉄瓶のお銚子も、燗の頃合がよさそう

だ??」

戦前の東京・巣鴨を舞台にした、このしみじみと美しい人情物語には、他にも、思わず郷愁を誘う、うっとりするような日本酒の名シーン（風景）、特に燗酒のシーンが、随所に登場します。読んでみると、これはもう燗酒を飲むしかない、という気持ちになりました。ものの本を調べてみると、お燗をする、お酒を温めて飲むという風習は、古くは平安の頃からあり、一般的に広まったのは、江戸時代後半。さらに、最近では温故知新というか、冷酒よりも酔い心地が優しい、その酒の真価がわかるなどと、この燗酒の



藤原理加

○取材協力／東京・四谷「萬屋おかげさん」主人・神崎泰敏氏
引用図書／「曠吉の恋 昭和人情馬鹿物語」(久世光彦著・角川書店)

魅力が最注目されています。吟醸酒をお燗にするなんて勿体ないと思われる方もいるかもしれませんが、せっかくのこの季節、いつもの冷酒をちよっと燗酒にしてみると、きつとまた別の味わいが楽しめると思います。特に、天然の乳酸菌を使って醸す、力強い酒質が特徴の「山廃」や「生」仕込みのお酒は、お燗にすることで強さや硬さがとれ、まろやかなパランスの取れた味わいに。もちろん、純米酒、本醸造、さらには古酒も面白い。いわゆる「燗上がりする酒」といわれる、燗をすることでよりしみじみと旨くなるお酒は、意外なほど沢山あるのです。ちなみに、最近の個人的なヒットは「杉勇」

(山形県・杉勇藤岡酒造場)の特別純米酒のぬる燗。喩えると、寡黙だがいざというときには頼りになる、きれいな辛口、男前の飲み口で、一口飲んで、う、旨い……と絶句してしまいました。

とはいえ、日本酒は好み。お燗も、熱燗(50度前後)、上燗(45度前後)、ぬる燗(40度前後)、人肌燗(35度前後)などがあり、温度によっても味わいは異なります。自分好みの温度、自分好みの燗酒を探すのも、またこれ日本酒の楽しみの一つと改めて知る冬の夜でした。

2005



陽だまりの街

絵

村上健

ふとしたことから村上健さんと知り合った。その午後、彼は東京の下町に飄々とあらわれ、ふと四辻に立ち止まり、ノートを開き鉛筆を走らせていた。覗き込むと、何が面白いのか、いわばそこから見える「何の変哲も無い」家並をデッサンしているのがあった。

ところで、読者各位は、「看板建築」という言葉があるのをご存知だろうか。路上観察学会員で東大生産技術研究所教授の藤森照信氏が名づけた言葉である。のっぺりとした二階家の板状の外見にモルタルや銅板製の装飾が施されている様子が、まさに看板か、あるいは、まるで看板のように見える家々のこと。

村上健さんにとっては、その看板建築こそ大好物らしい。

「陽だまりの街」

と、そのとき私は名づけた。

鎌倉に行こうと、金沢に行こうと、松江に行こうと、彼が描きたい対象はいつも、そんな家、店、街。村上画伯の描き出す「陽だまり」をこの一年、表紙でお楽しみいただきたい。

(本誌 佐山)

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世

中村康隆

大本山増上寺
法主

成田有恒

大本山百萬遍知恩寺
法主

大野忍敬

大本山清浄華院
法主

大田秀三

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

浄土宗宗務総長

水谷幸正

大本山増上寺執事長

江口定信

〒105-0011 港区芝公園四・七・三五

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709-3002 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二一
FAX 〇八六七 (二八) 二二六二一

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

長野教区
十念寺住職

袖山 榮真

〒380-0845 長野市西後町一五六八

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山 實相寺

〒420-0839 静岡市鷹匠二丁目二十四番十八号

玉桂山 華陽院

電話〇五四(二五二) 三六七三
FAX〇五四(二五二) 三六五六

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川 匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長 佐藤良純

淑徳学園中学校・高等学校

校長 大谷壽雄

塩釜市
雲上寺

東海林 良雲

浄土宗大願寺住職
浄土宗議会議員

神谷 英敏

正覚寺

住職 江藤英賢

〒915-0813 武生市京町二・一・八
TEL〇七七八(二二二) 一三一九
FAX〇七七八(二二二) 六一一七

世継地蔵 上徳寺

塩竈義弘
塩竈義明

京都市下京区富小路通五条下ル
本塩竈町五五六番地

弘経寺住職

金田 進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二・九・二八

孤峰山 蓮馨寺 吞龍上人奉祀
宝池院

川越市仏教会長

糸原 恒久

〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二) 〇〇四三
FAX〇四九(二二六) 〇六七六

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107・0052 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三（三五八三）三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132・0013 江戸川区江戸川三・八・一

伊勢教区

山下法文

松阪市樹敬寺

愚鈍院 こつぶがや文庫主

中村眞道
中村端貴

〒984・0051 仙台市若林区新寺三・一二・一七
電話〇二二（二五六）六〇五七

宗源寺

齋藤价洲

〒110・0015 台東区東上野五・一・六

函館

称名寺

〒040・0055 函館市船見町一八・一四
電話〇二三八（二三三）〇五七四

勝願寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八（五四二）〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543・0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六（六七七二）〇四四四

貞松院住職

山田和雄

〒392・0004 諏訪市諏訪二・一六・二二
電話 〇二六六（五二）一九七〇
FAX 〇二六六（五二）三四四六

〒112・0002

東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三（三八一四）三七〇一（代表）

定義如来

西方寺

〒989・3213 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二（三九三）二〇一一
HomePage: <http://www.johgi.or.jp/>
E-mail: saihouji@johgi.or.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158・0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140・0004 品川区南品川二・一・一二一

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248・0016 鎌倉市長谷四・二一・二八
電話 〇四六七 (二二二) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (二二二) 五〇五一

天光院

真野龍海

<http://www.evam.ne.jp/tenkoin>
ryumano@venus.dtl.ne.jp

光円寺住職

佐藤良純

〒112・0002 文京区小石川四・一二・八

横浜

大光院

www.daikoin.com

光取寺

大室了皓

〒141・0021 品川区上大崎一・五・一〇
電話 〇三 (三四四二) 八三八四

古き伝統技

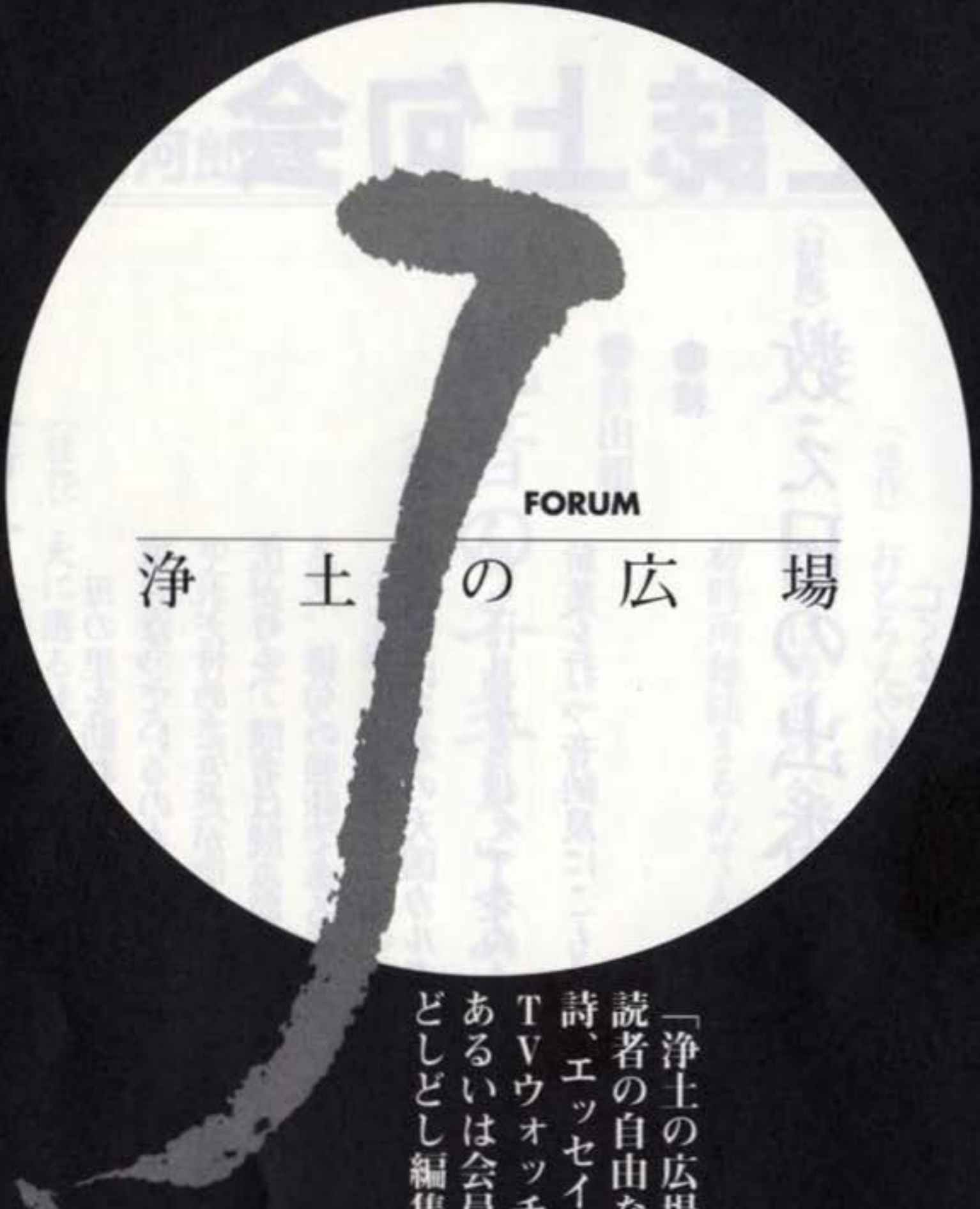
三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

株式会社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話 (03) 3842・11289
振替 00180・2・45231



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●屋

〔特選〕母許や納屋のひさしに干し菜吊り 中島富士子

母の里を訪ねる。納屋のひさしに干し菜が連らなっているのを見かける。句の表はただそれだけのことだが、ここから静かな農村の広がりをも、読者は読み取ることができるのである。俳句の強味である。

〔佳作〕屋根裏は子等の天国カルタ取り

金谷 友江

屋上に鳥居を据えて冬ぬくし

祐天寺 裕

新藁を打つ音納屋にこもりけり

浜口 佳春

●雑

〔特選〕数え日の出番や母の雑記帳

片桐てい女

亡くなった母の雑記帳を常にどこかに置いてある。年の暮れになるとこれに出番が来るのである。正月のしきたり、料理のこまごま

その他、もう首っ引きなのだ。母のありがたさを改めて思うのである。

〈佳作〉

おとろえや雑巾絞る水の冷え

佐藤 雅子

雑巾は昨日のパジャマ秋の果て

浜 裕子

初時雨雑誌まるめて人を待つ

谷 しげ子

●自由題

〈特選〉

観音の千手さまよう冬の蠅

蘭田 郁子

千手観音の御手にすがっている。飛びもならず、這うといっても、気がついたら隣の御手に移っていたというほどのものだ。こうやってすがりながら、命の絶えるのを待つしかないのだろう。

〈佳作〉

夫に選る杖のあれこれ遠時雨

中島富士子

石榴の実赤き涙のごとき艶

増田 信子

野の花にかがめば霧の降りて来ぬ

石原 新

自由題

遠 災

①季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

参加作品.....編集部選

屋

棟札に庄屋とのころ夕紅葉

周東 澄江

年玉を手に駄菓子屋へ急ぐ子ら

大場 清

音も無く屋根にそぼ降る時雨かな

中島 一子

対岸は紅葉の錦屋形船

佐藤 雅子

名刹の紅葉且つ散る屋根の反り

河合富美枝

大屋根の影くろぐろと冬の月

山本美代子

小春日や屋根より降ろす鬼瓦

片桐てい女

大屋根の豊かな反りや雁渡し

谷 しげ子

水車小屋峡の秋日をひたに溜め
屋号にて呼ぶ人のあり秋の浜

増田 信子
伊藤寿美子

雑

煩雑なたつきの日々や冬近し

周東 澄江

雑踏の街を抜けたる空っ風

中島富士子

雑踏に少女の赤き冬帽子

浜口 佳春

雑巾を刺して百歳年惜しむ

金谷 友江

自由題

箱庭のやうな駅弁山紅葉

佐藤 雅子

鎌倉に善男善女の十夜寺

河合富美枝

初日射す出土の太刀に殺気なし

片桐てい女

鉄塔の影地に這いぬ秋桜

井村 善也

書き出してつまずきし文夜寒かな

北川 弘子

濃紅葉ほしいままなる寺の裏

谷 しげ子

締切・二〇〇五年一月二十日
発表・『浄土』二〇〇五年四月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法
●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんはネッ

17 かい目

かまち♡おじろう。



編集後記

初夢に兵戈無用と鷹が舞う

岱潤

先日枕を買いに行つて気づいたのだが、動物で仰向けになつて寝る生き物など、一つもないと思われるのに、人間の寝姿は、何故仰向けを想定するのであるうか。真上を向いて寝るときの頭の形に合わせて、枕の寸法を決めることから枕選びが始まることに、些かとまどいを感じつつ、新しい枕を選んだ。

また、かい巻などという寝着もそうだが、仰向けのまま寝るということが、それほど理想なのであるうか、腰骨には良くても、内臓にはあまりいいように感じないのは、私だけなのであるうか。

腹を出して寝るなどという姿は、人間以外の動物がすると、あまりに無防備で

だらしく見えるのだが。：

さて初夢だ。今年はどんな夢が見られるか、神秘性があつてわくわくさせられる。末法絶頂期の現在、親鸞さんは「悲泣せよ」とおっしゃっているが、昨年から私たちは悲泣し続けている気がしてならない。年が替わり今年は酉年なのだから、ここは一つ威勢良くコケコッコーと、夜明けを告げてもらうわけにはゆかないものだろうか。

二十一世紀に入ってから、我々はあまりに悲しい現実を見続けている。方丈記から推測すれば法然上人が生きた時代も、現代と酷似していると思われる。今こそ法然上人の時代なのだろう。

(長)

雑誌「浄土」
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

次号二、三合併号は二月発行です。

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十一巻一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年十二月二十日

発行 平成十七年一月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーディーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

山本正明の
四季の和菓子

冬の茶趣

お正月の菓子 『初花』



初春とはいえ一月は小寒・大寒のある厳しい寒さの季節。その寒さの中、来訪される客人のために山本氏が、雪間の福寿草（別名元旦草）をイメージした温かい菓子「初花」を創りあげました。

それは、表面を少し濡りおろした柚子の皮を湯がいて水に晒し、苦味を取り、水と砂糖で二日間煮込みます。さらに、山芋を蒸して裏ごしし、グラニュー糖を加え白小豆の餡を入れ茶巾絞りにして柚子を置き、表面を焼くと、初春の菓子ができあがります。

寒いときは、温かさが馳走になります。

やまもと まさあき 「とゝや魚新」店長。昭和二十八年東京生まれ。京都「たん熊」他で修業の後、昭和五十六年東京赤坂の「とゝや魚新」開店とともに店長となる。“喰切おまかせ料理”を看板に一客一亭のもてなしをめざす。



法然上人鑽仰会の



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



※額装寸法47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話／03-3578-6947
FAX／03-3578-7036